

幕末明治期は、日本の歴史上、社会的にも文化的にも最も劇的な変容を遂げた時期であった。それは、それまで東アジア世界の中で自己完結していた前近代日本が、欧米列強の主導する国際社会に組み込まれ、その価値観に沿う近代的な国家体制とそれに見合った社会・文化を自ら作り上げてゆく過程であった。そして、それがわずか二十年ばかりの間に——寛政の改革以降の幕政改革を含めても、せいぜい十九世紀という約一世紀をかけて——成されたのである。

この、前近代的な国家・社会・文化から近代的なそれへの移行期、詩歌の領域においてひととき注目されるのは、次の二つの事実である。一つは、前近代日本における文化的価値観の源泉となり、陰ながらその国家や社会を支えていた和歌という文芸が、近代以降も決して廃絶されず、近代短歌として継承されたという事実である。そしてもう一つは、近代化の過程で、それまで日本には存在しなかった新体詩という新たな文芸が創始されたという事実である。

本書の構想は、これらの事実にまずは向き合い、なぜ和歌が近代以降も生き延びたのか、またなぜ新体詩なるものが創始されなければならなかったのか、という素朴な問いを立てたところから出発している。

そして、この問いに取り組むにあたり、筆者は次のような方法を取ろうと考えている。一つは、文芸の営みを単なる文学的優劣の観点から評価するのではなく、一種の社会的行為として捉えること、次に、

---

その社会的行為としての文芸の営みを、幕末明治期における社会変容過程に位置づけることである。結局のところ、なぜ和歌が近代以降も生き延びたのか、という問いは、和歌の言葉そのものから解き明かすことは出来ない。この問いは、なぜ近代以降の社会においても和歌が必要とされたのか、という問いと同義であり、よってこの問いについて考えるためには、社会と和歌との関係性の解明が不可欠だからである。

さて、本書が如上の方法を取ることによって、従来の文学研究に欠けていた以下のような視角が得られるものと予想する。一つは、これまで前近代と近代とで分断されがちであった幕末明治初期の詩歌を、連続する相において捉える視角である。次に、この時期を対象とする研究として文学よりもはるかに進んでいる、政治史や思想史・社会史・文化史など人文・社会科学諸分野における研究成果を踏まえ、文芸という一分野を超えた大きな歴史の流れの中で、文芸の営みを考えてゆく視角である。そして最後に、和歌と新体詩という、一見相異なるジャンルの文芸を、幕末明治期の社会変容過程において文芸の世界に生じた、表裏一体の二つの側面として一望の下に捉える視角である。

以上のような視角のもと、十九世紀日本において、日本の伝統文芸である和歌と、明治十年代にその和歌を否定することで成立した新興文芸の新体詩とが、ともに天皇を頂点とする新たな国家を支える役割を果たしたことを明らかにするのが、本書の目的である。



## 第一部 幕末明治の政治と和歌

### 第一章 孝明天皇と古今伝受——附・幕末古今伝受関係年表

はじめに……………

一 断絶した古今伝受……………

二 伝受の空白……………

三 万延元年の古今伝受……………

おわりに……………

### 第二章 近世後期の和学における和歌と教化

はじめに……………

一 儒者による和歌の教訓的解釈……………

二 宣長後の和学における教化の導入……………

三 実用としての和歌……………

おわりに……………

31  
31  
32  
38  
45  
51  
61  
61  
64  
69  
76  
81

第三章 幕末の仙台における藩政と和歌——保田光則編『訓誡歌集』をめぐって	88
はじめに	88
一 光則の学問形成——漢学と和学と	90
二 藩の文教政策と光則の文業	94
三 『訓誡歌集』の概要	101
四 男性向け教訓歌集としての『訓誡歌集』	107
おわりに	112
第四章 国体と和歌——水戸藩による『明倫歌集』の編纂について	116
はじめに	116
一 勅撰集の夢	119
二 体裁をめぐる問題——「勅撰之体」か「類題」か	123
三 歌集の内容	130
四 『訓誡歌集』との比較	135
おわりに——流通の問題と併せて	140

第五章 教導職の万葉選歌——国民教化と和歌

はじめに……

一 『名教百首』編纂の経緯……

二 万葉選歌としての特徴……

三 『明倫歌集』との相違……

おわりに——国民教化と和歌……

149 149 151 154 158 164

第二部 〈草莽〉と和歌

第六章 連鎖する志——安政の大獄における水戸〈義民〉の詠歌

はじめに……

一 幕末の水戸における〈義民〉の形成過程……

二 安政六年の〈義民〉……

三 〈義民〉の交友と詠歌……

四 述志の歌の連鎖……

173 173 177 181 186 191

五 〈義民〉のネットワーク	195
おわりに	201
第七章 尊王攘夷歌の史的位罫——『新葉集』受容と幕末の類題集	205
はじめに	205
一 幕末の『新葉集』受容——「忠義」の歌集として	207
二 「異国船」はどう詠まれたか	211
三 攘夷歌としての「異国船」詠	217
四 攘夷歌の母体としての詠史歌と祝歌	221
おわりに	226
第八章 志士の歌を読む	228
はじめに	228
一 歌語「かばね」の系譜	231
二 歌語「やまとだましひ」の系譜	236

三 「たましひ」の行方……………	241
おわりに……………	246
第九章 幕末の志士はなぜ和歌を詠んだのか——漢詩文化の中の和歌……………	249
はじめに……………	249
一 志士の詩歌における尊王攘夷表現……………	250
二 吉田松陰における天……………	253
三 心を汲み取る神……………	259
四 〈想像の君臣唱和〉……………	264
おわりに……………	269
第十章 振気から教化へ——勤王志士詩歌集のゆくえ……………	272
はじめに……………	272
一 二つの『精神一注』——村井本から青柳本へ……………	274
二 志士詩歌集における「文人詩客」……………	277

三 国民教化との結びつき……………	284
おわりに——志士詩歌集のゆくえ……………	291
<b>第三部 新体詩と「歌」</b>	
<b>第十一章 『新体詩抄』における「歌」</b>	301
はじめに……………	301
一 「日本ノ詩」と「明治ノ歌」……………	304
二 自然なものとしての「俗曲」……………	310
三 「連続したる思想」の表現……………	316
おわりに……………	322
<b>第十二章 『新体詩歌』の出版を支えた人々</b>	327
はじめに……………	327
一 竹内隆信について（その一）——来峽から『新体詩歌』の編纂まで……………	329
二 竹内隆信について（その二）——『新体詩歌』の出版とその後の活動……………	336

三	坂部広貫について……………	345
四	首藤次郎および広瀬要人について……………	348
	おわりに……………	353
第十三章	近世韻文としての新体詩——『新体詩抄』と『新体詩歌』をめぐって……………	358
	はじめに……………	358
一	七五調韻文の系譜……………	360
二	『新体詩抄』と教訓和讃……………	366
三	『新体詩歌』と近世七五調韻文……………	370
	おわりに……………	376
第十四章	七五調の幕末明治——今様評価の変遷と加藤校老編『古今今様集』……………	379
	はじめに……………	379
一	俗としての七五調……………	383
二	五七調の相対化とその意義——長歌改良論争をめぐって……………	387

目次

三	加藤校老『古今今様集』の位置	393
	おわりに	401
	第十五章 与謝野晶子の星の歌——『みだれ髪』と土井晚翠	405
	はじめに	405
一	晶子の初期歌篇における星	407
二	藤村・晚翠から鉄幹・晶子へ	410
三	『みだれ髪』と晚翠	414
	おわりに	419
	終章	423
	あとがき	431
	初出一覧	441
	索引	左1